

‘呪われた血’の叛逆詩人 (9)

George Gordon Byron

楠 本 哲 夫

目 次

第七章 Exile

本稿のテーマは

——詩人バイロンが separation による世の誹謗の声が高まりゆくとき、詩人自ら追放を決意し自らにむかって、それを宣言して 祖国英国と永遠に袂別する、その道行を究めること——である。

しんか 荊軻 刺秦王の壮途におもむくとき、

“風 蕭々として 易水寒し

壮士 一度去って 不復還”

と詠んだあの感懷に似た悲壯感が いま^{さすが}流石に詩人 Byron の壮途に 漂う。このときが、Byron にとって、死地をギリシャに求めての、祖国への永遠の袂別、の旅立であった。

Byron は 誇り高き 名門 Byron 家のすべてをすてて、一巡礼者として、永遠に還らざる 不帰の客となるべく 祖国を捨てる。

“英国よ われ 汝を愛す

あまたの 瑕疵^{きず}の あるがまま”

カレーの波に かくよびし

ことばは 今も 胸にあり

スコットランドの高原をかけ廻^{めぐ}った少年の日、ロンドンの私娼街の蕩児たりし ケムブリッジ大学時代、Grand Tour より帰国、一躍、社交界、政界の若きプリンスとして、華やかに デビュー したこと、そして、Caroline Lamb との艶聞、Annabella との 1 年 4 カ月の 束^{つか}の間の結婚、——離別、そして……

祖国追放^{／＼} 永久追放^{／＼}

その追放命令を下し、指揮をとったのは、最も詩人を愛したはずの 妻、Lady Byron, Annabella だったのである。

Byron は、終生、息^{いき}たゆるその日まで、その追放の理^り由^ゆを どうしても 解し得なかったという。

とにも角にも 遂にその追放宣言を下したのは、永^{えい}久^{きう}追^{しゅ}放^{ぽう}宣^{せん}言^{ごん}を下したのは、実に——Byron 自^じ身^{しん}だったのである。

Byron は、祖国への袂別の最後の月、多くの人々へ 袂別のことばをのべ、そして——

多くの袂別のことばが 彼^きに對^{たい}して私^さ語^ごか^やれた。

彼の、最も、許せないことばは Mrs. Clermont にむかって、

‘Born in the garret, in the kitchen bred.’

に始まる詩行としてうたわれた。

この詩は 彼女を攻撃し、侮辱するものだったが、1870年 Mrs. Beeche Stowe —Annabella 側についた 闘士だった——は、“Mrs. Clermont こそは非常に立派な、尊敬すべき、上品な、英国女性である。”として、彼女を賞め讃えた。

Byron の最も 寛大な袂別のことばは、Annabella にむかって よびかけられた。

Even though unforgiving, never
‘Gainst thee shall my heart rebel.

僕は 君を 許しはしない、 決して。
だが 僕の心は 君に背くことはしない！

英国社交界の名流婦人たちは Byron に対して きわめて不寛容な態度を、いや、厳しく、冷やかな態度を ^{あら}露はに示した。

Byron が Augusta を エスコートして 出席した パーティでは、彼にむかって鄭 ^{ていちょう}重にあいさつした女性は、わづかに 二名しかいなかった。

だが、四つの新聞は 彼を擁護した。
それは——

the Examiner, Morning Chronicle, News, and Independens Whig だった。

そのパーティーでの、二人の、同情的態度を示した女性は——
Lady Jersey (the hostess) と Margaret Mercer Elphinstone——彼の旧恋の女性——だけだった。

Jersey 夫人が お別れパーティの舞踏会を催して、Byron と Augusta とを招待した。しかし二人の姿を見るや否や、いままで室内にいた多くのひとびとは、一人のこらず さっと部屋を出ていってしまった。

ただ昔ながらに、なつかしく、話しかけてきたのは the Hostess の Jersey の他には、Elphinstone だけだった。

美しい赤毛の彼女は、もし、Byron が Annabella と結婚しなかったならば、結婚相手として 最も望み、そうなるように、いや、なっていたかもしれない女性であった。

彼女は Byron との袂別に際して、

“あなたは、私と結婚していたら よかったのです。そうしたら、このような悲劇は起こらなかったのですのに、” と、しんみり と語ったという。

Byron は じっと腕を組んで、多勢の者が部屋から去ってゆくのをみつめながら、この四年の間、自分に向けられ 集中された熱狂的歓迎の日々と 絶頂的人気の渦が、忽然と退潮してしまったことを、名声のはかなく、^{うたかた}泡沫よりも空しいことを いま、まのあたりに感じとったのである。

新聞——特に保守党系の新聞——は、筆をそろえて 彼を痛罵した。

Byron が 摂政王の専制政治に反対したことで、貴族に捨てられ、——今や、

貞淑な Annabella、残虐な Byron として、更に加えて 民衆の怒りを買った。

熱烈な同情が妻 Annabella によせられ、憎悪が背徳乱倫の夫 Byron に集った。群衆心理で右往左往する大衆は一切の理由には耳を貸すことはしない。

一切の新聞は、かつて、“ナポレオンを^{たた}頌う詩”をかいた 国賊 Byron に、さらに罪一等を加えて 彼を葬り去ることに 躍り上った、一斉に蜂起した。／

Byron の敵は 一致団結して “驕児 Byron を叩き倒せ。／” と連呼した。

四面楚歌の中であって、彼は むしろ、^{きん}欣然として、祖国永久追放を 自ら、決意し、自らにむかって宣言した。／

口ぎたない新聞界からは Byron にむかって しきりと罵声が浴びせかけられた。

たとえば――

“He goes in foreign lands prepared to find a life more suited to his guilty mind

彼は ゆく ^{とつくに}外国に。／

そして、そこには

彼の罪深き 心に

ふさわしい生活が 用意されて

諷刺作家 Thomas Love Peacock は Byron の友人達によって開催された 袂別の dinner party で Byron を賞め讃え、彼の “Nightmare Abbey” の中でこの憂愁なるロマン詩人 Mr. Cypres (Byron) は

‘to rake seas and rivers,
lakes and canals,
for the moon of
ideal beauty.’

海を、川を、湖を、運河を、かきたてるため

あの 理想の月を求めて

彼はゆく。／＼

と詠った。

Byron は1818年、この詩をよんだとき、とてもよろこび、Peacock に
薔薇の蕾 を贈った。

そしてこれは Peacock の手によって、

From Byron to T. L. Peacock と刻まれた金のロケットの中に わくづけさ
れていたという。

1816年4月14日、Byron と Augusta は 涙で目がみえなくなるまでに 泣
きぬれて お互にわかれ を告げた。そしてこれが、二人にとって 永遠の別
れ になるだろうことをお互いに、わかっていたが ゆえに。

Thou wert the solitary star
which rose and set not to the last.

君こそ 一つ星

最後まで 天上にあり

沈むことなき

しかし——

Byron にとって、Augusta が、いつも光^きやけき 一つ星の存在ではな
かった。

詩人を慕いよる また ひとりの女性が、Augusta と涙の袂別の後、11時
間にして、はやばやとして現れ、Byron は 彼女に彼の保^{るい}壘に入りこむことを
許したのである。

それは 17才の Claire (Jane) Clairmont——William Godwin, (the philosopher of free love) の step-daughter——であった。

詩人にとって 女性とは、魚と水の関係であり、その身边に たえず、女性の存在が必要であった。それは 詩人の女性に向ける やさしき であり、みづからの 弱さ、人間的弱さ、 ゆえであった。

自由主義者 Goldwin 一家は、最近、世の厳しい試練をうけてきた。

彼の妻 Mary Woolstonecraft の娘——Mary Godwin は 若き詩人 Percy Bysshe Shelley と駈落し、Godwin の激怒するところとなった。

Byron に関する世論が Claire のところに ‘今、自分は、自分の独占できる、この詩人である Byron を 恋人 として もってよいのだ、’ という気持を、かりたて あふったのである。

数通の手紙と文学的作品が Pimlico, Arabella Row 13 番地から Byron 宛に とどけられた。

これが、Byron の心をとらえる ロマンチックな若き女性のする、あのいうもの、おきまりの予備行為となったのである。

しかし Claire は——

ランデヴーの手筈を取決めるやいなや、ただちに 詩人と一夜をともにする準備をもとのえた。

これは、Byron の 英国ですごした最後の週の間ロンドン郊外の、ある場所で行われた。

この、ランデヴーにより、二人は、それぞれの、傷ついた空虚さを癒やすこ

とができた、そして、それが、せめてもの、目的だったのである。

Byron としては、このはかない密通をいつまでもつづけるつもりはなかった。しかし、Claire への最後の袂別のことは、その意味では必ずしも賢明なものではなかった。

‘Poste Restante, at Geneva’

Separation 別居の手続、^{とりきめ}取決のすべては、Byron の友人達の立合いのもとに 4月21日に 署名された。

23日までには、Piccadilly Terrace 13番地の家は——家財一切をも借金の支払にあて売却され——引越す準備 が完了していた。

ガランとして何一つ残されていない大きな広い屋敷の中で一人ポツンと 淋しく 最後の夜を、さすがに、Byron は、^{もだ}悶え、どうこくし、おえつし、のたうち廻りながら Augusta への袂別、もう、ふたたび 会うことはないであろう妻 Annabella への 永遠のわかれ ^{うた}の詩 を、ほうり落つる涙とにじむインクで 綴った。

^{なにゆえ}何故の別居なのか？ Byron には、どうしても わからなかった。彼には終生、その理由が わからなかったという。

Byron は Bad ではなく、真に、優しい人間だったのだ！

24日、Byron は Hobhouse と共に Charles Churchill——18世紀の諷刺詩人——の墓に詣でて最後の袂別^{わかれ}を告げた

Byron の崇拝した、この詩人の墓を訪れるのは、これが24回目であり、最後であったが、この慧星の如くあらわれた詩人の墓前で、今回は、彼は 英国へ

の最後の袂別^{うた}の詩を書いた——そして、Byron みづからも、やがて 英国の生んだ、英国の空に突如、そのすがたを現した慧星^{すいせい} “The comet of a season ”であったのだが——

その墓のある Dover の丘の寒風の吹き嵐ぶ中、追放の身を、異国へと永遠に旅立つひとときを、船出を 万感の懷いで 待っていた。

英国よ、我、汝を愛す
あまたの 瑕疵^{きず} のあるがまま……

祖国 英国を、その血を誇りし 祖先の、墳墓の地、英国を愛するが故に、——その現実の墮落^{だらく}、腐敗^{ふはい}のすがたに 体当りして、敗れたみづからの運命を——愛国の詩人なるがゆえに 叛逆詩人の烙印を刻まれる運命を甘受すべく、——むしろ、呪われた その血の さわぐところを、今、異国の湖^{うみ} で 鎮め^{しず}ようとする——旅立ちであった。

4月25日、寝室付きのメイドに変装した、社交会の、せんさく好きな、数人の、名流女性達は、旅立ちゆく、Byron のすがたを 最後に 一目ちらっと 垣間^{かいま}みて、無言^{むごん}の袂別^{わかれ}を告げた。

Byron は Hobhouse とともに荒れ狂う海の方へと歩いていった。そして、そこで、彼は郵便船に乗り込んだ。

Hobhouse は、Byron をのせた その郵便船が Ostend へむかって去りゆくのを じっとみつめていた。そして祈った。

‘The dear fellow pulled off his cap & waved it to me... God bless him for a gallant spirit and a kind one...’

—親愛なる、この友は、ぼうしをぬいで、それを私の方へ向けて ふった…。
神よ、この勇しい魂、そして優しい魂に祝福をたれ給へ、——と。

いま Byron の胸中は——
一条の希望の光を求めゆく旅であり、^{すじ}少くとも 全面的に うちひしがれては
いなかった。

Byron は この3月、Thomas Moore が、ある名誉職に任命されたとき、
その祝いのことばをのべた際、それとなく、みづからの、この日の袂別^{わかれ}をも、
それとなく 意味することばをつたえていた。

——これが、有徳な人のみ を待ちうける尊厳であってほしい。しかし、そ
のとき、貴男は36才であることを想起してください。……そして 僕は、僕
が、かくの如き、白髪^{しらげ}の完成期を迎える日までに、僕には まだ 生くべき、
善良に 幸せに 生くべき 8年の歳月がある。もし 僕に、いやしくも、
そのような完成期を迎えることのできる日が到来することがあるとすれば、そ
のときまでには——おそらく、僕は、僕自身も、そのとき 偉大な、前進的
有徳な 完成の境地に達していることだろう—— とかいた。

果して Byron は、そのことば どおり、きっかり、まさしく 8年の彼の、
その後の生涯を生き、そして、その年月は、“good” 立派な生きざまを証し
えたのであった。

Byron は ふたたび 異国の土をふんで Ostend の宿で 旅客となる。そし
て艶めいた春をうかletたい気分^{きぶん}にひたる。

同行した主治医 John William Polidori は彼の日記に こうかいた。

‘Byron は 部屋につくやいなや、like a thunderbolt のように、寢室係のメイドに倒れかかった。’

この Pollidolly は—— Byron は 彼をそうよんだが—— three literary Rossettis, Dante Gabriel, Chrisliana and William Michael の叔父であった人だが——この旅に Byron に同行した。

そしてスイス人の旅行案内人も1人 備われた。又、いつも身近につかえた、老僕 Fletcher、小姓の Robert Rushton も 随行した。

Flanders には、Byron は、あまり心が 惹かれなかったようだった。その艶めかしい画風、そして、その無味乾燥な風景画にも、まったく 惹かれるところはなかったようだった。

“Reubens の画（女性群像はみな赤いガウンを身にまとい、首はもちろん、両肩まで、赤一色だった。”と Augusta に書き送った。

“貴女も御存知のように、私には平坦な道は適しないのです。私のゆく道は断崖絶壁を駆け上り かけおきる ことなのです”

Wellington や Blucher が Napoleon を 駆逐した あの歴史的に有名な pave も、 彼にとって、“ただの延々と、いつまでも続く単なる pave にすぎなかった。”

しかし——

Waterloo の古戦場は Byron の心に、深い感銘をあたえた。

最初の数分間、彼は、心うたれて、じっと見つめたまま、まったく、口のきけないほどに、おしだまったままで 対峙した。しばらくして 口を開いて言

った。

“私は Marathon の平原に深い感銘を覚えたが、これは、全くそれと同様、美しい。” と。

そして一行が the Chateau of Hougoumont へとむかうとき、ふたたび 黙りこんで、その感動にじっと耐えていた。そこへつくと、彼のムードは また急回転して、アルバニアの軍歌を高らかに うたいながら、その古戦場を馬で早駈^がけていった。

一行がドイツの方へとむかう途中で、Byron のこれまでの経験を、Childe Harold の Canto III として まとめたい という構想が でき上った。

And Harold stands upon this place of skulls,
The grave of France, the deadly Waterloo!

かくて ハロールドは 立つ
しゃれこうべの眠る 戦跡に
そは フランスの墓地
今は死すウォルターの古戦場

Byron は、Napoleon の coach を擬した、それは500パウンドをかけた、濃^と緑^{みどり}の coach を駈^かって、さらに南の方へと逍遥した。

以前の、あの、気ままな、巡礼の気ままな旅の思い出が また、蘇^そってきた。

The Rhine ラインの美しい流れは、詩人の心に、 その “美しく流れゆく^{けい}溪

谷”の絶景を、そして、かつての、心ゆくまでの Conslantinople の谷間での早駆けの思い出を提供した。

また、平和に パイプをくわえたスイスのアルプスの羊飼たちは、彼に ギリシャの、あの羊飼^{びつじかい} 達 ——片手にパイプをもち、 片手に musket マスケット銃をもった——のすがたを蘇らせた。

彼の心は祖国の自由のためなら、あえて暴力をも許すことができた。

たとえば、Avenches の近くの Morat の The dead, そこでは、スイス軍が 15世紀ブルゴーニュの圧政者たちを 敗北させたのである。

今、Byron は、その、うづ高くつまれた骨のいくらかを Murray に送った。それも、——その当時の慣習だったが——それで一組のナイフの柄をつくるというよりも、むしろ ‘a quater of a hero’ をつくるに十分なほどを送った。

このスイス人の勇ましい死の example は Childe Harold, Canto III の中でうたわれた。

‘Morat and Marathon twin names shall stands.’

詩人の一行は、すでに the Jura ジュラ山脈——スイス と フランス の国境の山脈——を踏破していた。 その間、——
Byron と Polidori は

‘Clouds were mountains or mountains clouds’ か、いづれかと、さかんに議論しあった。

突然、そのとき、 Byron の 脳裏に^{びらめ} 閃くものがあった。

これからの四カ月の間、自分にとっての、愛人は 誰であるのか をハッと

して 悟った。それは 姉 Augusta のように、いつも 優しく よりそって
くれる愛人 は、誰であるのだろうか と いうことを はっきりと 直感
し得たことであった。

それは Lemane の湖であった。／

‘Lake Lemane woos me with its crystal face’

水晶の如き 澄明な 湖面に漂う 優しい微笑^{ほほえみ}こそ、レマ^{うみ}ンの湖 が 詩
人に、 言いよる 愛しき人^{いと}の 求愛のすがたであった。／

5月25日——

一行は、M. Dejean's Hote^l d'Angleterre——Geneva の街のちょっと 手前の
——に投宿した。

Byron は宿帳に 100才 とかいた。それは、‘古代の人骨’ the ancient
bones’ に比べて、自分が、そんなに より若いとは、感じ得なかったので——。

M. Dejean は 正しい年令の 28才に変えるようにと求め、訂正させた。

しかし Claire Clairmont は Shelley と共に、2週間前にここについていて、
宿帳に Byron の名前を いち早くみつけて、いたづらっぽく、からかい半分
で、こうかいた。

“お気毒ですわ。あなたが そんなに お年を召したのは。ほんとうに、あな
たはもう200才じゃないかと思ったのよ。だって、あなたの旅は、とても、の
ろのろと、ひまがかかるんですもの。でも、神が あなたに やさしい眠
りを贈ることを祈ります。

私は今、ここで、あなたに会えるのが、 とても 幸福なのです。 Claire
より。

Byron は、そんなに ^{しあわ}幸せ ではなかった。しかし、それは 彼自身の罪ではなかった。

何故、彼は、彼女にその adress を 知らせたのだろうか？

彼の心は——

あの冬枯れのロンドンの三月の間、いつも、最寄りの、とまり木にとまっていた。

‘alighted on the nearest perch’

——そして、それは、Lady Melbourne にかつて打明けたように、彼の心は、いつも そうであったのだが——

今、詩人は、この ‘とまり木’ を 下から、切り離そう と しきりに望む気持だった。しかし、そのことは、絶望的であることを 知った。 詩人の心は、今、その意味で、うつうつとして たのしまなかった。

Shelley は Byron に会えることを期待して すでに Geneva にやってきていた。そして Mary は ロンドンで Byron には 紹介されて 顔見識りの仲であった。

6月10日迄には——

Shelley の一行は、港を見下ろす Cologne の Villa Montalegre に落着いていた。

そして Byron は、2～300ヤード 離れたところにある Villa Diodati に落着いた。

この別荘では——

彼の小さなベッドには、朝日がさしこみ、そしてその三面には ベランダがあり、そのほそい支柱に支えられた別荘からは、水晶のような Lake of Geneva

(Lake of Leman) レマン湖を 見晴らすことができた。

2世紀以前、30才の Milton は、この Diodati の別荘の客となって、このロマンティックな湖畔を逍遙している。

また、その一世紀前、Calvin は、Byron の将来の破滅をあたかも 予言する如く、ここで、彼の厳^いしい、神の意に抗^さう者への運命への 信条^{しんぎょう}を 説いている。

Milton から ちょうど1世紀後の1739年、若き詩人 Thomas Gray は ロマン派にむかって 次の如く のべている。

“アルプスの山が 人の魂に対して なげかけるものは、訴えるものは、その torrent でもなく、その cliff でもなく、それが、宗教と詩 を内在することにある。

無神論者のところに 畏敬の念をかきたて、無神論への疑惑へとひきこみ、神の存在を 教える、ある景観が アルプスの威容の中に厳存する。”

Byron の死後1年して、文学批評家 William Hazlitt は この Alps への信仰的異敬の念を述べて

“アルプスを踏破することは 現代の流行を追いやく者達に 身震いするような、ある、道徳的戦慄^{せんりつ}をあたえる” とその意あるところをもらした。

18世紀の間、Jean-Jacques Rousseau は、この、レマン湖のほとりを Julie と Saint-Preux の物語、彼の Nouvelle Heloise の恋人たちで、拭いがたい印象を 人々の心に刻みつけている。

Edward Gibbon は Mme de Stael の母, Mlle Sussanne Curchod と恋におちいている間、そして、それが終わったとき、ここで、The Decline and Fall of the Roman Empire をかきあげた。

Mme de Stael はそのとき まだ Coppet にいた。

そして今、Byron と Shelley は——この二人の shy な若き世代の詩人が、この湖畔で、たまたま、1816年5月27日に めぐりあったのである。

Shelley との交友は Byron にとって、彼の詩風とその生涯の両面に多大の影響を与えることになった。

Byron の心の苦悶が今や、一つの新しい局面——ロマンティックな、形而上学的——をとって展開されてゆくことになるのであるが、それは一つには、彼が、哲学的 Shelley の影響をうけたためである。

後年、Shelley の革命的理想が、Byron を活動的生涯へとひきずり戻すことに一役 買った。

この若き詩人 Shelley は わづかに 23才だったが Byron はすでに Shelley の、Queen Mab (1813) をよんでいた。
——これは、Kings, priests, statemen を全面的に拒否し、これに反対し、くり返し“神というものは存在しないのだ”と極論した。

これに代る人間^{かわ}の道徳的向上、進歩の可能性を信ずる Shelley の信念——あらゆる人の心には、しかし、完全、完成への萌芽が内在する——は Byron の信条とは、およそ、縁遠いものだったのだが……

しかし 二人は、レマン湖の上に、ヨットをうかべ アルプス山中を騎馬でかけめぐり、Diodatio の別荘の炉辺で語り、数時間をすごすことが しばし

ば であった。

Shelley の自然と人間を観る鋭い感じ方はやがて ほとんど全面的に Byron 自身の、自然観、人間観となっていた。

二人の最初の遠出は レマン湖をボートでさか上っていった。

Byron と Shelley は 6 月 22 日、Geneva を出帆して Polidori は、つれていかなかった。というのは、Byron の suggestion で、Mary を救うため とんだために ^{くるぶし} 踝 をくじいていたから。

この若い doctor, Polidori は 自分の傭い主である Byron に対し、多少の jealousy そねみ心を 抱いていたようだ。

What is there excepting writing poetry?

彼は、Byron に対して、かつて、こう、尋ねたことがあった。

‘あなたは、詩をかくことを除いたら、どんなとりえ があるのですか
that I cannot do better than you.

もっとも、私は、そのことは——詩をかくこと——あなたより、うまくは、
できないことなのですが……

彼が、このように、Shelley との^{かんたん}肝胆相照す Byron との交友の仲を ねたんで、Byron に対し——

あなたは、詩をかくこと以外に、どんなとりえ があるのですか と、まことに、無礼な質問にも かかわらず、Byron は皮肉 たっぷりに ズバリと豪放に Polidori に 一矢をむくいて 次の如く 答えた。

先づ第一に——

僕は、あのドアの鍵穴をピストルで射ぬくことができるよ。

第二に——

僕は あの河 the Rhine ライン河を 泳いで渡ることが できるよ。

第三に——

僕は、君を、したたかに、ぶんなぐって、うちすえることができるよ。 と、

ところで、かわいそうに、Pollydory 医師は、（跋行の）Byron 以上に、うまく跳躍ができなくて、自分のくるぶしを、ねんざしたのであった。そのため、レマン湖 探訪の壮挙に参加できなかったことは、彼にとって まことに いかん であった。

この二人の詩人の、このレマン湖周遊の旅の寄港地は Rousseau が the *Novelle Heloise* の中で描いた村々であった。

Byron と Shelley にとって Rousseau は their guiding spirit となったのだが、Rousseau は、*Confessions* の中で、彼の偉大な愛の物語、そして 現世の樂園の地として、何故にこれらの現地 scenes を選んだかの、いきさつ、事情を つぎの如く述べている。

“私が この湖を選んだのは——私の心が いつも、このあたりを さまようことをやめなかったからです。

その景観の豊かにして変化に富むこと すべてが 莊嚴にして 雄大であること のせいだったのです” と。

Byron と Shelley は、聖 Preux 追放の地、Meillerie で 山の甘美さを心ゆくまで、満喫したのち、 激しい突風、squall が 吹き荒れて 二人にとって

極度に 彼等の勇氣を試練される accident に あって、そして 生死の境をさまよう。

各自が、それぞれのやり方でベストをつくした。

泳げない Shelley は、両腕を組み 坐り、湖底に向って 無抵抗に スーッと 沈みゆく覚悟をきめて 心の準備をした。

Byron は、服を脱いで 自分達二人を救助すべく身構えた。

しかし、どうにか 危く いのちを取とめることができた。

その翌日——二人は跋行しながら、St. Gingolph におもむき、湖の果てるところにある中世の Chillon 城を訪ねた。

ここは、Juliet が 彼女の致命的事故に遭遇したところである。

ここで、二人は、その土牢と拷問の室に、何ともいえないふんいきを伝える中世独得の反響に深く印象づけられた。そして湧き出づる詩想を鼓舞された。

Shelley は——

その猥劣みにくさにぞっとさせられる沈黙のムードの中で、へきえきしながら Hymn to Intellectual Beauty をかき上げた。

彼は、その霊に対して、自分をなだめてくれるようにと祈ったのである、何故ならば、自分自身を恐れ、すべての人類を愛することが自分の背負った運命である と Shelley は みづからを観じていたから。

一方、Byron は——

彼もまた、みづからを恐れつつも、すべての人類を愛することはできなくて、他の者たちへの奉仕によって 自らの悲運に挑む人々をのみ愛することができた。

この Chillon 城には、かつて、スイスの改革者、Geneva の聖 Victor 教会の Prior Francis Bonivard が 湖面下の地下牢 の第五支柱に 四年間、鎖でつながれていた。

彼は、the Duke of Savoy に反抗し、挑んだ罪で投獄され、1536年ベルン Berne——スイスの首都——の軍隊が、この城を占拠して、彼を 解放した。と伝えられている。

Byron は、Bonivard の牢獄の第三支柱に 自らの名を刻んだ。そしてそれは1812年に ここを訪れた 一訪問者により発見され、今日、尚、保存されている。

ここで、彼の最も有名な詩の一つ、The Prisoner of Chillon が かきあげられた。たった二日間で、だが 実質的には、即坐にこの場でそのときの強い印象を一気呵成に、詠まれ、つくられたのである。

Byron は——この詩において、Bonivard が、同胞たちが飢死するのをじっとみつめていなければならなかったのだという想像をめぐらしながら、ガイドの話を改作したのである。

Byron は 妻と離別して家庭から開放された今、生活が一巡してきたのを知る。

そしてもし 家庭が牢獄であるとするならば、牢獄は 隠者の庵であり、くつろぎの場 home であると観じる。

My very chains and I grew friends,
So much a long communion lends
To make us what we are: even I
Regain'd my freedom with a sigh.

僕の鎖^{くさり} と 僕は
友となった
長い長い親交によって
僕達の今日の友情を得た
さらに 僕は
溜息^{ためいき} まじりに
私の自由を
ふたたび とり戻した

この詩の中で、Bonivard は 全面的に殉教者として謳われているのではないことを 今日、われわれは知るのである。

Bonivard は 柱に鎖でつながれてはいないし また 牢獄も 湖面下ではなかった。

——もっとも、ある視覚的幻想が そのように観じさせたかもしれないけれども——

Bonivard は 熟年、いや、更に 老境をたのしみながら 四度、結婚し、その四度目の若き妻は、姦通の故に、溺死させられた。

彼の、死んだ6人の兄弟達の考えは、多分、Dante の Inferno, Canto xxxiii から とりあげられたものだろう。

だが、そのどれ一つとして Byron 詩の美に ある影響を与えているものとは 考えられない。 というのは、Byron 詩は 永遠をうたうものであるから。

Byron 詩の中では、Bonivard は、あくまで Promethean プロメウスの 人物として描かれ、岩にではなく 柱につながれている。

Byron と Shelley は Chillon から Claren へ向けて出帆した。

そして そこで ふたたび Jean-Jacques の精神に傾倒する。

Rousseau は——Shelley の如く、たとえ ‘知性美’ ではなくとも、少くとも、 ‘理想美’ を礼讃した。

Rousseau が the Romantics ロマン派詩人に、とくに、Byron と Shelley に与えた影響はきわめて 大きく 深い ものであった。

Rousseau によって ‘情緒への讃美’ の心は確立され得た とも言いきることができだろう。

さらに——彼自身の生涯において Rousseau は、“迫害” について、現実的、或いは、想像上の、ロマン派の抱く典型的理念 を例証した。

Rousseau は追放者であった。そして——Byron と Shelley の心の内奥にふれて、これを揺さぶった感動的な次のことばを書いている。

——もし、祖国に真に貢献できるような書物を書こうと身命を賭すことを願うならば、その著書は、国外において書かれなければならない——と。

6月27日、——Byron と Shelley は Lausanne の港, Ouchy に 寄港する。

この日は、Gibbon が 彼の著, Decline and Fall を書きあげた記念日だったので、彼が かつて、ここで、これをかいた、今は老朽しつつある四阿^{あづまや}を訪れた。

Murray は——Byron から、Childe Harold, the third Canto は ほぼ完成した というしらせと共に いくまいかの Gibbon の記念の アカシアと 薔薇の葉をうけとった。

この Canto の中では Leman 湖 周遊の旅が きわめて変った詩趣をそえている。

“オールからしたたる かるやかな水滴の音がきこえ、空の詩なる星が見え、

湖の岸边から いきづく芳香を いっぱい 吸いこむ” とうたっている。

しかし ^{やまなみ}山脈もまた、詩人に話しかけ そしてときに Wordsworth の、自然礼讃の、あの声で——

Are not the mountains, waves, and skies a part
Of me and of my Soul, as I of them?

山は 波は 私の一部
そして 私の魂の一部
それは——私が
それらの一部であるように

Byron は 後で こう述べた——

Shelley は、私に、吐き気を催すまでに、Wordsworth という薬の錠剤を 服用せつづけたものだ。

そして、その、吐き気は、彼が 次の如き、模倣的詩行をかきあげたのちも
なお、続発したものだった。

……to me

High mountains are a feeling, but the hum
Of human cities torture

私にとって

高き山は ひとつの心なのだ

だが しかし

ひとの住む巷の

あの喧騒は ——— 拷問である

Wordsworth は “Titern Abbey” の中で ‘mountains were to him a feeling’

——山が 彼にとって ひとつの^{こころ} だった——とうたっている。

しかし、この、Byron の、^{ちまた} 巷の^{けんそう} 喧騒 the cities’ hum への反撥、嫌悪、拒否反応は、そんなに長くは続かなかった。

結局、彼は、Hobhouse が パスポートを 手に入れてくれ、同行することができるようになるや否や、活気にみちた Italy へ 行くべく 準備をし始めた。

Hobhouse は Hundred Days と題する彼の著書が官憲の疑惑をあふりたてたという背景的事情によって Byron に同道することになったのである。

だが このイタリア行は、Byron が Geneva の騒音のことを考えたことが、主因である。

1821年、Byron は、吐きすてる如く、次のように言った。

‘スイスは、世界の最もロマンティックな地帯におかれた、^う ^ず ^ぎ ^た ^ない ^豚 ^野 ^郎 ^だ ^も ^の ^す ^む ^国 である と。

彼は諸の政治的理由で イタリアの Ravenna を去らねばならなくなりそうであった。そして5年後にはまた、Geneva に帰ることを考えていた。

しかし、調べて見ると、Geneva 州 etc の全域にわたって 英国の植民地があることがわかった。そしておそらく あの高価な villa, Diodati よりも はるかに家賃が騰貴するであろうことが考えられた。

Byron にとって ‘世界で最もロマンティックな一角’ であるスイスが 何故に 彼の永久の住み処^か とならなかったのだろうか？
その理由は、事実、いくつか あった。

Geneva の人々は、その当時、まだ、英語を話していなかった。そして又、イタリア語——Byron の、唯一、最も得意とする、流暢な外国語——も 話さなかった。

Byron は、この地方の、教養ある名士達とは、うまく、交友し、それを広めていった。

The Pichets, Sismondi, Schlegel, そして若き銀行家の M. Hentsch, Bern の老 Bonsletten——彼は、Cambridge で、Thomas Gray とは旧知の仲だった——と交友をひろめた。

しかし——

かの偉大な詩聖 Gothe が Byron に傾倒し彼の作品を絶讃したとき、彼の名声 が ドイツ全土に、スイス全土に、ひびき渡った。そして、The Prisoner of Chillon が先づ、The Swiss Family Robinson の著者である Rudolf Vyss によって、1819年、ドイツ語に翻訳された。

スイス人達は——Byron が好きになった——イギリス人達——Byron が好きになれなかった——を歓待した。

Mme de Staël は、その最も適切な、例だった。

彼女は、勇しく、熱意をこめて、彼の Separation のことを弁護し、さらに——結局は徒労に終わったが——和解をとりまとめようと東奔西走した。

彼女は50才で、Byronにとって Old Mother Stäel として、なつかしい、親しみある存在だったが、すばらしい、才気喚擡の会話、あくことをしらぬおしゃべり好きな、溜々たる弁舌さわやかな女性であった。

Byron も 彼女を、そう、よんだが、この ‘Our lady of Coppet’ こそ、この時代の、いや、あらゆる世代を通じて、最も、すばらしい、^{けんらん}絢爛たる、知性溢れる女性であった。

しかし——この小塔のある Coppet の中庭で、ステップで、書斎で、サロンで、彼は 多くの英国人にあった。

Byron が はじめて この館を訪れたとき、Byron と言う名前をきいただけで、作家の Elizabeth Hervey——William Beckford の義妹——は気が遠くなった という。

the Duchess de Broglie,——Mme de Stäel の娘——は “まるで 65才 の如き、老いた風貌で、あまりにも ひどい” と評した という。

Byron は そのときの様子をみづから述べて、

“みなが、この私を、まるで 珍しい show の中で 異国産の野獣を見るかのように、あるいは、大衆の中に、まるで ‘悪魔の王’ がいるかのように 私を じろりと見た” と、かいている。そして、——

Byron のつれた小姓は、Caloline Lamb か、Augusta Leigh が 変装しているのだろうと 噂された。

The Villa Diodati には、Geneva から 英国の望遠鏡が向けられ この terrace からの情報が 逐一 伝えられていた。そして、この噂が、たちまち

英国に流れてゆき、そこで、興味深い、^{せんりつ}戦慄が Byron のスイスでの bad company に対して 派手やかに湧き起こった。あまりにも、よくないもの

so bad として、Byron は、——かくして、英国でも、そして、この土地でも、みなものから 避けられ、敬遠された。

ここで——Byron にとって、ほとほと困ったことが起こった。

それは、これらの女性群からの trouble ではなかったのに、しかし、そのことは、まるで そうであるように Augusta の耳には噂として 伝わっていた。

Byron は 弁明する如く

“今、僕には、つづいている trouble があるのですが……” と そう書いた。

それは 実は、Claire Clairmont からの執拗な誘いであった。

Claire は Byron によって身籠ったことを知った。そして このことを彼女は ちっとも悩みはしなかった。

Mary には Shelley との間に18カ月になる庶子の baby William がいた。
そして彼女と Shelley とは 1816年12月以後——そのとき Shelley の妻、Harriet が河に身を投げ自殺した——まで結婚できなかった。

そのような事情を知るゆえに、Claire の望んだのは、Byron との結婚ではなかった。

彼女は——

彼女の手紙の中で Byron に

“ここに入らんとする者は、すべての希望をすてよ” という 結婚という形態に対して、示した motto を書き送ったほど the Godwin philosophy に心酔していた。

Claire の希望は Byron との間にできた子供によって 二人の仲が、愛が強化され、相よる魂の結びつきが 深まりゆくことであった。

Claire は Byron のために、しばしば Chillon を浄書してやった。そして Byron と Shelley, Claire と Mary の四人が 友として、Shelley が指示する課題のもとに しばしば夕刻の一時を会合して、詩的、哲学的、議論に耽った。

Byron の好きな Christabel (by Coleridge) を声高に吟誦したとき、Shelley には——Byron がそうよんだ——‘a fit of fantasy’ が襲ったが、それは、Poridori によって うまく 処理された。

Christabel の中の魔女 the evil Lamica の しばんだ乳房 が Shelley に、乳頭にじっと目をそそいだ、ある女性——その女性のことを Shelley はかつて噂にきいたことがある——のことを思いださせたのである。

彼等の冥想は、やがて、宇宙の深淵の問題へと ややもすれば 進んでいった。と言うのは、この世紀は、前世紀の諸々の発見を吸収し、今や、展けゆく新しい時代のふちに立つ、明けゆく嵐の世代であったから。

当時、活気づいていた Dr. Erasmus Darwin の諸々の実験は、——四人は、それをそのように理解していたが——半世紀後に、Chares Darwin の進化論として うけつがれた。

このとき すでに、動（流）電気説、月の磁気力、動物磁気説、そして、やがて 唯心論も、唱えられてきた。

産業革命は すでに 古代ギリシャの、water 水の ‘element’ を steam 蒸気として奴隷化し、今や fire 火の element は、electricity 電気 なりとして動力化 されようとしていた。

電気の性質と雷 の関係は 18世紀の B. Franklin の大発見以来 すでにわかっていた。

Childe Harold, Canto III の中で Byron は彼の最も dinamic 律動的な感動を 'Lightning' という一語で 具象化しようと試みた。

一方, 'Manfred' の中では, その主人公は, the Promethean spark' を 'The lightning of my being' と うたっている。

Shelley は, 後に, 彼の作品, Prometheus Unbound の中で、この元素的発見をする詩的高僧となるのであるが, そこでは, この電気を永遠に保有する者こそ この世の楽園 an earthy paradise をつくり出すのである。

しかし——Prometheus 'bound'——fire 火によって人類の神秘的救世主となったが the Caucasus へ追放され, 神によって残酷な罰をうけた——は, すでに, この四人の友の心の中に大きな位置を占めていた。

Byron の ode, 'Prometheus' は 苦悶への精神の勝利を予知するものであった。そして, 1816年, 彼が書いたすべての詩は, 実に, Prometheus 的タッチのものばかりであった。—— Shelley は, Byron が, この ode をかく前に, the Prometheus Bound of Aeschylus を Byron のために翻訳してやった。——

大陸の恐怖物語の集大成, そして, おそらく, 絶滅した動物に関する Cuvier の研究に刺激されてか, Byron は, 'Darkness'——この世の最後における最後の人間の, ぞっとするような幻想 —— をかいた。

I had a dream, which was not all a dream.

The bright sun extinguished……

and the icy earth

Swung blind and blackening in the moonless air……

私は 夢をみた そして、それは
全面的に 夢ではない、
あの輝く太陽は消えて
そして 冷い地球は
^{めし}盲いて 月のない空に
暗くなりゆく

10年後、Mary は——

The Last Man という小説を出版した。

さて、この四人が、各自、a ghost story を書くことを決めたとき、結局 Mary だけが、唯一人、成功した。

彼女は、多少、Shelley の ‘fit of fantasy’ の style をまねて、激しい苦痛の悪夢を経て Frankenstein’ 即ち、The Modern Prometheus 現代版プロメテウスをかきあげた。

Shelley と Claire は脱落し、Byron は、Ephesus の破滅について、ちょっとした断片的作品をかいた。

そして、これを後に、Polidori が The Vampyre として剽窃した。

しかし、Byron もまた、彼の Albanian songs を大海原にむかって大声で叫んだとき血を凝結させることができたであろう。

おそらく、そんな理由で 彼は ‘Albe’ と呼ばれた。

8月18日——

Mathew Gregory Lewis が到着したことは Byron の思想に 創作上の ひづ

みを与えることになった。

というのは、この ‘Monk’ は、Byron に Goethe の ‘Faust’ をもってきてくれた。そして Byron は、これを声高によみあげながら 翻訳していった。

‘Albe’ は、しかし、この田園詩を、完結しないまま、終らせる決意をした。

Byron は、もし、Claire との関係を、完全にたち切らねば、Claire の子供 (Byron との間の) が 自分と彼女の結びつきを、より近づけるきづなとなるであろうことを、実感した。そして、その決断を実行した。

8月29日——

Shelley に、彼女と Mary を Shelley の家に連れ帰るように依頼した。

Byron の唯一の譲歩、妥協は、彼が、その子を養育する、そして、Claire は ‘aunt’ として その子に会うことをゆるし、 だが Byron 自身とは、彼女は 会わない ということを 条件とした。

Byron は——blue-stocking 知性的女性は、どうしても 愛することができなかった。女らしい、妖艶な、肉感的なまめかしさに欠ける、理知的美貌は、愛し得なかった。

その意味で Byron は Claire を愛し続けることができなかったのである。

Claire の場合——

もし、Byron が 彼女に対して もっと 優しく接していたならば、Byron の招いた傷口は、Annabella の場合より、もっと 深いものになっていただろう。

とに角、Byron は、Claire との情事の結末を姉 Augusta に良心の呵責を感じながら打ち明けたとき、何らかの、そのような口実を必要とした。

“親愛なる姉, Augusta! 今, どうか, 私を叱らないで下さい。しかし, 私には, 何ができるのでしょうか? 私は, 彼女を愛してはいなかったのです。私はどんな女性にも愛情をのこしたことはなかったのです。

しかし, 私は——

一人の女性——私を迎撃すべく, 千里の道を緊急発進してきた, そして 私を非哲学的にしてしまった——に対して, 厳しく掟を守って the stoic のまねごとを 演ずることは 出来ないのです。

そのうえ, 私は, すでに, あまりにも多くの “two courses and a desert” で, もう, 飽食 気味なのです。それも, 呼吸困難, 嫌悪感を覚えるほどなのです。だから, 今は, もう むしろ, ささやかな愛を求めてゆきたい心境なのです。

この, 何とも, ちぐはぐな, 貧弱な手紙の最後で, 結局, Byron は, 少年時代の, あの, カルビン教的, ちんぷな文句に逆戻りしている。

‘結局, 私は, 人々を^{あらそ}争いに巻きこむ運命を背負って生れてきたように思える’ と。

Hobhouse が passport 一切をもって, Shelley 一行が出発する直前に到着した。

彼は Augusta に 彼女の弟 Byron が ずいぶんと健康を回復したことを報告することができた。

“ブランディも口にせず, ガブガブ と ソーダ水を のむこともせず, あの, かん高い癪癢の声を立てることも すっかり消えた” と。

しかし Byron の, Hobhouse を 伴っての旅は 必ずしも 成功ではなかった。

最も興味深かったことと言えば、——

Shelley が ホテルの宿帳に、おそらく、Byron の、いつもの、やりかたに、しげきされてのことだろうが、年齢は100才。行先は地獄。ギリシャでの職業は、民主主義者博愛家、そして無神論者。と記入しているのを発見したことであった。

この 最初の二つは、彼を敵視した連中から ‘革命的’ ‘倒錯的’ と解釈された。

Byron は Shelley の名誉のために、Shelley の、この記入を抹消してやった。しかし、Shelley は、他のどのホテルでも、この記入登録をくり返していた。

旅の連中、最も興を殺いだことといえば、——ある英国婦人観光客が、Mont Blanc の山に対峙して

“あなたは、これよりも、より田園的なるものを 他に 観たことが おありですか” ときいたことであった。

それは、あたかも Byron が、Highgate か Hampstead か、Brompton か、Hayes とでも 書いたかのように。

Byron にとって 全く、興ざめた質問だった。

9月17日——

Byron と Hobhouse は、ベルンの Oberland に出かけ そこで 13日間を過した。

Byron は、この探険旅行の日、Augusta のために、日記にかいた。

そして、その出発の日、Augusta に書き送った。

“貴女が修道女であり、私が修道僧であったとすれば、私達は 海をへだててではなく 鉄格子を通して 話し合うことができるでありませうのに。だが、そのことは、どうでもいい、たいしたことではないのです。私の声と私の心は、いつも、貴女のものなのだから……”

それは、Ronsseau の Ouchy の心をかき送ったものだが Byron が 新しい Hedoise としての Augusta に、そしてみづからは Abelard として 彼女に会うことは 容易であった。

アルプスへのこの旅は、自らのやりきれない気持ちを払拭しようとするところみであった——つまり、それは 詩作によってではなく、探訪という行為によって——。

いかにも Byron は、日記はつけたが、彼の散文は、詩作ほど、彼の心の鎮痛剤とはならなかった。散文をかくことによって現実への意識はあまりにも、その表面に迫っていった。

最初は この旅によって Byron の気持は充たされるように思えた。

the Dent de Jaman, the Wengernalp（今日、この山には ‘Byron Hill’ がある）、the Scheidegg の高峰をよじ登ること、そして、星明りで、the Jungfrau 処女峰、the wicked Eiger, the Grindelwald Gracier を眺望すること、そして Lake Thun, Lake Brienz 湖畔のへんびな村々を訪れること、そして、農夫たちのウォルツ、——英国よりも、ずっとすばらしい踊り——をじっと眺めたのしむこと、は心おどるばかりの歓喜であった。

Byron は疲労を歓迎した。

“So much the better—I shall sleep.”

隨時隨所に見られる、心うつ Byron の描写にも不拘、——

a mountain's 'epaulettes of cloud,'
a river 'rapid as anger,'
a glacier 'like a frozen hurricane,'
a peak 'shining like truth,
weather 'as the day on which
Paradise was made'——

Paradise は 無情に消えうせ それは、 Hell 地獄へと変っていった。

元来、Byron の筆には、Gray の筆致とは似てもつかぬ、地獄絵を見る如き直
喻 similie がある。

The Staubbach falls were like 'the tail of a white horse streaming in the
wind……

the "pale horse" on which Death is mounted in the Apocalypse':

an avalanche was the Devil being pelted into Hell:

clouds curling up the precipices were

'the foam of the Ocean of Hell……white, and sulphury……'

行動することによっても、prose をかくことによっても、Byron の心の き
づは、癒やされなかった。数々の痛ましい、できごとの思い出を、これらが
追放してくれる手段とはなり得なかった。それほど、Augusta と Annabella
を 共に失ったことへの痛手は深かったのであろう。

聖 Martin 教会、Vevey の中にある Ludlow 将軍を記念する tablet は、実
に、Byron の心の中に、——

大罪を犯した罪人の妻たる Lady Ludlow が夫と共に、その追放の運命を甘受し、最後まで、その夫にしたがい 至誠を貫き、ゆるぎない愛に殉じた、その夫に捧げた純愛——を想起させた。

Byron は、Hobhouse と共に、枯れてしまった松林の中を歩きながら、自らのすがたを、自分の家族のすがたを、そこに見るように思えてならなかった。

この旅の最後の日、彼は自分の挫折^{ざせつ} をしみじみと告白した。

羊飼の吹く笛の音も、雪崩れの音も、急流の音も、山も、氷河も、一瞬たりとも、私の心の重くなるしさを軽くしてくれることはできなかった。そしてまた、私の頭上の、周囲の、眼下のこの壮麗、威容、栄光の中に、私のみじめな姿を埋没し消しすることはできなかった。

Byron が もし——このとき、別れた後の、Augusta の悲運を知っていたら、あのアルプスの高峰に湧き立つ雲が もっともっと 硫黄臭く 思えたであろう。

Annabella は Augusta を許してはいなかった。そして、ぞっとするような処置を 彼女が、Augusta に対してとったのは、Augusta には 道徳性に欠ける一面がある と 判断したためである。

Annabella は Augusta に対して、守るべき、いくつかのルールを課した。

それは——

1. Byron からの手紙は 必ず Annabella に見せること
2. Byron に親しく 手紙をかき送らぬこと

3. とくに, Byron の心に, 邪念をおこさせる, あゝの、二人の間の^{しるし}
‘A+’ の符号は 使用しないこと

4. Augusta は——Byron の気持を和らげ 慰めるのではなくて, Byron の
姿勢を矯正しなければならない こと

という とり決めであった。

Augusta は, Annabella より命じられて, Byron の軌道修正, Byron の姿勢
をただすべく 便りをかき送った。

Byron は, この間の事情を知るや, 心安からぬものがあつたが, 昔通り, 姉
Augusta への, 親愛の情をこめて, あゝの ‘A+’ の符号を依然として, その使用
を禁じられているにもかかわらず, 書き送りつづけた。

その間——

彼は, Manfred——A Mystery としてかかれた詩劇——の二幕をすでに書き上
げていた。そしてこれは部分的には, うまく描かれ成功した——それは,
where his excursions and journals failed の場面である。

Count Manfred マンフレッド伯爵は Byron 的 主人公であり, 致命的情
事を展界しつつ, それを新しい領域へと 開拓してゆく

Manfred 伯爵は——

彼の, ゴシック 風の, アルプスの居城の中で 精神的に 孤高の人 であ
り, そこで, 自らの プロメウスの ‘火花’ を^{あふ}煽る, ファウスト的 善と悪に

についての知識を 完成する。

彼は 自らの姿を ‘half dust half deity’ と悟る。そして人間界の制約された道徳律によって その厳しい掟の故に、 全面的に うちひしがれてしまう。

同時に、彼の過去において背負ってきた ‘some half-maddening sin’ が、彼の、この 現在の 耐えがたい misery 悲惨 をさらに 加えてゆくのである。

一方、死の恐怖が、彼自身と、自らの生命を絶ちきることによる ‘自己忘却への願望’ の間にたえず立ちふさがった。

彼の運命は ^{あき}明らかに、もし彼が^{みづか}自らの生命を^{みづか}自ら絶ちきる勇気をふるいおこさなければ——それは、卑怯者なのだろうか——凋落 wither してゆくであろう。

Byron は ^{つい}終に——

みづからの生命を絶ちきることによる ‘自己忘却への願望’ を決行した

そして アルプスの高峰 Jung Frau 処女峰の断崖から身を投げた。——
Byron は、以前から このアルプスの処女峰での自殺を決行しようと決意していたのである。

しかし、chamois アルプス^{かもしか}羚羊のハンターが 彼を正気づかせて救った。

瀧のそばで、彼は、過去の罪を アルプスの魔神に誓ってざんげする。
——自分の姉 Astarte のところが、自分の心をじっと見つめ、そして次第に^な委
えてゆく、そして Astarte が今、地獄——悪魔の霊、Arimanes の Hall にす
む。その次第、様子を 描写している。

Manfred は下界におりて 彼女の幻影にめぐり会うが、彼女は彼女の口から 今、Manfred を愛しているということを一言も言わぬ。そして、いや、さらに、Manfred を許すということも一言も言わぬ。

彼女の彼に約束できることはただ、 朝がくれば 彼が そのみじめな生涯に終止符をうつ運命にある という一言だけであった。

ここで、Manfred, Act II は終っている。そして Byron が、Act III をいかにすすめるかにゆきつまったのは、——

Byron 自身が、Manfred と同一のみじめな人物であるとするならば、Byron 自身のゆきつまりを どう 処置すべきかが わからないのと 同一であった。

9月8日——彼は、

Annabella のことで Augusta に手紙をかいた。

“彼女が、いや、Separation ‘離別’ が、僕の心をずたずたに引裂いた。僕は、あたかも、一頭の巨象が、僕の心臓を 踏みつけたかのように感ずる。しかし——

僕は、どうにか立ち直ろうと努力する。ああ、息苦しい……” と。

Caroline Lamb は、かつて——Byron と Annabella との仲を——

“あれは elephant 象の 悪ふざけ、いたずら だワ” と Annabella を評した

今や、その metaphor は 真実 その通りとなって、Annabella は Byron の心臓の上で elephant dance を 踊っていた。

Switzerland での四カ月余にわたる滞在が、しかしながら、England から

もちきたった Byron の傷は 癒やされるべくもなかった。

実に、考えてみれば、あの、ものすごい、嵐と雪崩^{なだれ}の印象によって——そして特に、この夏は、異常に、嵐が激しかったが——心の傷は さらに 悪化した。

‘Childe Harold, Canto III’ で, Byron 自身の筆で 彼はこう書いた——

“私は これを書きつづりながら、哲学と山と湖と、癒^{いや}しがたい傷ついた愛と、口にはいえぬ想い、そして、私自身の罪の悪夢の間で、半ば 狂乱状態にあった。”

しかし——Byron にとって、スイスは毒気ある、^{よど}澱んだ 経験ではなかった。Prof Clubbe のことばによれば、Byron にとって、この時期が 一つの分岐点となった。

Byron は Arimanes の支配する下界へと、降りていった。 と言うのは、死を通してのみ、彼は 新しく蘇えることができる と悟ったから。

The ‘July 1816’ poems は、新しい プロメウスの Promethean 集中砲火を浴びていた。

Prometheus itself and the ‘God like crime’;
Lake Leman and ‘the heirs of immortality’;
Chillon’s ‘Eternal Spirit of the chainless mind’;
Monody on Sheridan and his ‘fire from Heaven’;
A fragment on the ‘breathless being’ of death;
The Dream and the ‘Quick Spirit of the Universe’;
Darkness and the ‘prayer for light’;

そして最後に, the Promethean cry in Stanzas in Augusta, は,

‘それらは 私を苦しめる。だが——

私は、それに 屈伏はしない

と プロメウスは 叫ぶ

Byron のところは——

高場と不滅のプロメウスの輝き をもち、厳しい、人間的孤独、さびしさ を
もつ。

Manfred の主人公のように——

‘The lion is alone, and so am I’

Byron は 彼自身 生きつづけ、明日の運命に向き合わねばならぬ。という
ことを知っていた。

しかし———どのようにして？

参 考 文 献

- 1) Elizabeth Longford: Byron, Hutchinson.
- 2) Ernest Hartly Coleridge: The Poetical Works of Lord Byrhone; Lewis Prints.
- 3) Francis, M. Doherty: Byron
- 4) Leslie, A. Marchand: Byron's Poetry, John Murray.
- 5) John, D. Jump: Byron, Rontledye & Keygan Paul.